



チ ョ ー サ ー

カンタベリ物語

ラ ブ レ ー

第一之書 ガルガンチュウ物語
第二之書 パンタグリュエル物語

西脇順三郎・渡辺一夫 訳

世界文学大系

筑摩書房版

世界文学大系 8

チャーター
ラブレター

昭和 36 年 11 月 30 日発行

定価 500 円

訳者	西脇順三郎
	渡辺一夫
発行者	古田 晁
印刷者	山元正宜
発行所	株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8
振替東京 165768 電話 (291)局 7651

目次

チヨ―サー

カンタベリ物語

西協順三郎訳
5

ラブレー

第一之書 ガルガンチュワ物語

渡辺一夫訳
179

第二之書 パンタグリニエル物語

渡辺一夫訳
274

チヨ―サー

ラブレー

ハクスレー
繁尾久訳
361

ア田ラ
山田 齋訳
367

解説 チヨ―サー

西協順三郎

372

ラブレー

二宮 敬

378

年譜

382

装
幀
庫
田
茲

チ
ヨ
ー
サ
ー

カンタベリ物語

ぶろろぐ

時は四月。

夕立ちがやわらかにやってきて、三月ひでりの根本までしみとおってしまふ。そのおしめりの精気で花が生まれて咲いてくる。

そよ風もまた、香ばしい息を吹いて、どこの山林地にも荒野にも、柔かい新芽が枝にふいてきた。

まだ若い太陽も、春分からめぐり出して、白羊宮を半分以上もめぐってきだした四月の初旬。

ナイチンゲールという小鳥は、夜中もおちおち眠らないで、美しい節回しで鳴いている。

それはどまどに、自然の力というものは、小鳥の心でさえも、やるせなく突くものか。

こんな季節になると、人々は霊廟の巡礼にあらがれて、遠い諸國の国々へ旅立つのだ。

パレスチナの聖地巡礼をする人は、海を越えて、外国へとあこがれる。

とくにイギリスでは、どの州のはてからも、カンタベリの巡礼を思いたち、病気をいやして

くだされた、聖トマストマスの参詣に出かけるのだ。

そんな季節の、ある日のこと私は神妙にも信心ごろをこして、カンタベリの参詣に出かけることにしたのである。

ロンドンの南の地区の、スースウェルクというところにあった「陣羽織」という宿屋にとまって、そこで巡礼の支度をした。

すると、その夕方、二十九人もの団体が、どやどやとその宿屋にはいつてきた。

聞いてみると、いろいろの人たちが途中で偶然おちあつて、団体をつくつたというのである。みんなカンタベリの巡礼に出かける人たちであつた。

この宿屋は部屋も既なも広いし、客のもてなしも上々であつた。

やがて、日が沈んでから、私はその連中の一人一人と話をしてみる機会をえた。

早速、私もその団体の仲間入りをした。

明日は、早く起きて、出発することに話がまとまつた。

だが、この「物語」をする前に、時間も暇もあることだから、この団体にいる人たちを、一人一人について、自分の見たとおりに紹介してみるのが無駄ではあるまい。

では、その人物、身分、身なりを紹介することにしよう。

まず、ここに一人の騎士がいるが、この人から始めることにしよう。

この騎士は立派な人物だ。初陣ういじんの若いころから騎士道を尊び、真理、名譽、大度、礼節を重

んじた。

主君と一緒に戦争に出て、大いに手柄をたてた。彼ほど、遠くの国々まで遠征に出かけた者はいない。キリスト教國でも異教國でも、いたるところで、いつも勇邁な譽れを得てきた。

アレキサンドリア占領當時も、彼はそこにいた。プロシヤでも、しばしば各國の連合軍の中で、食卓の上席を与えられた。リチュアニアへも、ロシアへも遠征に出かけた。キリスト教國人として、彼はどしどし遠征に参加した者はすくない。グラナダで、アルヘセーラスの攻略の時も、これに参加したし、ベルマリアにも遠征したことがある。ヤサスにも、アッタリヤにも、その攻略のおりに参加していた。また東部地中海では、幾度も有名な上陸作戦に参加した。激戦にも十五たび加わつた。トレメゼンでは、キリスト教のために三度も一騎打ちをして、いつも相手の敵を殺してのけた。

この騎士はまたかつて、バラチヤの領主に従つて、トルコで他の異教徒と闘つたものだが、いつも名声をかちえた。勇敢ではあつたが、一方賢明でもあり、その態度は乙女のように優しかった。一生の間、何びとに対してもかつて不作法な言葉を使つたことがない。真に完全な君子であつた。

だが、そのいでたちについていうと、彼の馬は立派だったが、彼自身はあまり目だった風采をしてはいなかつた。コール天の上衣をきていたが、それが鎖帷子のためにひどくよこれてゐた。さいきん遠征から帰つたばかりで、すぐま

た巡礼に出かけて来たからだ。

彼と一緒に、彼の御曹子が従者としてついていた。この青年は、今のところ恋をしているひとりのもので、元気のよい騎士の見習であった。その垂れ髪は鍔をかけたように、きれいにまかれ、縮れていた。

年は二十前後でもあったろう。身丈は中背、非常に活潑で腕力も強い。フランドルや、アルトワや、ピカルディーなどへ、かつて遠征に出かけたこともある。夫人の愛顧と歓心を買うために、わずかの間によく手柄をたてた。

刺繍を施した上衣を着ていたので、まるで白や赤のなまなましい花がいっぱいに咲いている牧場のように見えた。一日じゅう歌を唄ったり笛を吹いたりしていた。五月の月のように鮮かにうるわしかった。長い広いものついた短い上衣を着ていた。馬術に巧妙であった。歌も作り詩もよく作った。馬上の槍試合も、舞踏もよくした。絵も書もよくかいた。彼の恋は熱烈なもので、夜を啼き明かすナイチンゲールのように、眠ったことがなかった。彼は礼儀正しく、謙遜で、よく人のためにつとめ、食卓では父の前で肉切りを勤めた(当時の紳士。のたしなみ。)

騎士は一人の忠僕をつれていた。このたびの旅では、他に一人も従僕をつれていなかったが、それは主人たる父の望みであった。

忠僕は緑色の頭巾と上衣を着ていた。孔雀の羽根のついた、矢の根のするどく光る矢を一えびら、バンドの下にきりつとさげていた。(武

士の家来らしく、彼も武器の手入れは心得ていたから、彼の矢には、一本の羽根もたるんでいなかった。手には大きな弓をもっていた。いがぐり頭で、とび色の顔をしていた。山や森の狩猟の知識には精通していた。腕に派手な弓籠手をつけて、腰には太刀と円盾をさげ、腰の他の側には、きれいな飾りのついた、槍の穂先のうに尖った、派手な短刀をさしていた。胸にはびかびか光る銀製のクリストフル(子供にキリ軍の服)という聖者のお守り札をさげていた。角笛をもっていた。また肩から斜めに吊る剣吊りも緑色であった。思うに、彼は実のところ山林の猟場の番人であったろう。

尼さんもいた。それは尼寺の長で、そのほはえむところを見ると、実に無邪気で内気らしい女であった。この女が用いる最大の誓いの言葉は「聖エリジウス」一点張りだ。この女はマダム・エグランティーンとよばれていた。

実にうまくお祈りの歌を唄うが、また実際に上品に鼻声で調子をとった。またフランス語を実にあざやかに優雅に話す。もつとも、それはストラット・アツテ・ポーウェ(ロンドンにあった有名)流ではあるが、なにしろバリのフランス語は彼女の知るところでなかったのだからどうも仕方がない。

食事の礼儀作法などもまたよく心得ていた。唇についたものは少しも落さないし、皿の中へ指を入れても、そう指を濡らさないようにするし、胸の上に物を落さないように、うまく食物

を口へ運んでもゆく。非常に礼儀作法をたしなんでいた。飲み物を飲んだあとで、コップに油や汁などの跡が残らないように、上唇をきれいに拭いた。食べ物を取るんだって、いかにももつもらしく手をのばすというふうだ。

確かに性質には大変快活なところがあって、陽気で、人に対しては愛想がよかった。つとめて宮廷のふうをまねたり、態度に威厳をつけようとしたり、いつも人から尊敬されるように気をつけていた。この人の信念について言えば、慈善心の深い情け深いところがあって、一匹のねずみがわなにかかって死んでいたり、血を出していたりするのを見ただけで、もう泣いたものだ。小犬をたくさん飼っていて、焼き肉や牛乳や上等な堅パンを食べさせた。一匹でも死のうものなら、また誰か棒でなぐりでもしようものなら、ひどく泣き出す始末だ。この女はまったく道義心と同情心そのものであった。

その尼頭巾は几帳面に折目がついていた。鼻はすっきりと尖って、眼はガラスのように灰色を帯びていた。口は非常に小さく、また柔かそうで、かつ赤かった。だがしかし、確かにすばらしいおでこの持主だ。確かに親指と小指を張った広さはある。というのも実は、この女はけつして発育不完全のほうではなかったから。

外套は実に上品に見えた。珊瑚珠とところどころ緑の玉を配置した念珠を腕のところに、かけていた。またその上にびかびかする金の飾りを吊っていた。その飾りには花文字のAから始まって Amor vincit omnia (愛はすべてを征

服する」と彫ってあった。

この尼さんは、自分の下役をするもう一人の尼さんと、三人の僧とを従者に連れていた。

ひとりの修道院僧がいた。ずぬけて立派なしろものだ。寺領監督役で、狩りの好きな僧であった(狩りは僧には禁)。男らしい男で、修道院長にもなれそうな立派なやつだ。立派な馬をたくさん飼っていた。こいつが馬に乗って出かける時、ヒューヒュー鳴る風の中から手綱の鈴がジリンジリン聞こえてくる。この坊主が長をしている僧庵の礼拝堂の鐘の音のように、手綱の鈴がはつきりと大きく聞こえてくる。聖マウルスや聖ベネディクトの定めた修道院法は、旧式でやや厳格すぎるので、この修道院僧はそんな古いものはほうってしまつて、新世界に適應した行き方を採用した。昔の修道院規則の教義などは頭から軽蔑して、羽をむしった雌鶏よりも価値がないとした。その教義では、狩りするものは聖人でないという。また修道院に住まぬ修道僧は水中に住まぬ魚に等しいともいうが、それはつまり修道院を出た僧侶のことである。

しかしこいつはそうした教義など牡蠣一つの価値もないと思つていた。彼の説も確かに一説だと、その時私はそう言つてやつた。修道院の中で書物を読んでばかりいたり、またオーガSTEINの教えるように、手にて働き、肉体的労働ばかりしておれば、人は結局馬鹿な氣遣いじみた者になってしまうが、なんのために、そこまでして勉強しなければならぬのか？ そ

んなことをして世間に奉仕することができると思ふのか？ 汗水たらして働くことは聖オーガSTEINにまかしておけばよい、などというのである。

こいつはしかも、恐ろしく乱暴な狩りをする男なんだから世話はない。小鳥のごとく早く駆けける獵犬を飼つていた。乱暴に馬を乗りまわして、うさを狩ることが大好きであつた。それというのも、彼はもともと費用に眼をくれなかつた。袖口のところには灰色のりすの毛皮をつけていた。しかも国じゅうでの極上の品をつけていた。またあごの下で頭巾を留めるために、黄金細工の珍しいピンを持っていた。その太いほうの先には比翼結びにした蝶形のリボンがついていた。

頭は禿げて、ガラス玉のように輝いていた。顔も油で洗つたようにつやつやしていた。でぶでぶ太つた長老様だ。眼は鋭く、ひっこんでぎよるぎよるして、大釜のかまどのように火焰に燃えていた。その長靴はしなやかで、その馬は堂々としていた。さても確かに立派な僧正だ、けつしてやつれた幽霊のようにおおざめてはいなかつた。好物はでかい丸焼きの白鳥であつた。乗つていた馬は木の実のようにとび色であつた。

一人の托鉢僧がいた。粗野な元氣のよいやつで、ちゃんと縄張りを定めた托鉢の免許状をもつていた。まことに陽気な男であつた。托鉢僧の四つの宗派の中でもこいつほど無駄口とお世辞のうまい者はなからう。自腹をきつて、自分

が手をつけた若い娘に結婚を取りもつたことなどざらにあつた。彼は自分の宗派中じや大切な支柱として尊敬されてゐた。田舎ではいたるところの小地主から親しまれ、可愛がられた。町では立派な金持の女房たちとも親しかつたし、評判もよかつた。自分でも言つてゐる通りに、彼は教区の牧師よりも人に懺悔をさせる力をもつていた。というのも、彼はその宗派から懺悔を聴く免許状を貰つてゐる僧であつた。じつさい優しいようすで人に懺悔をやらせし、また懺悔を容れて赦罪を与えるやり方も愉快なものであつた。いいお布施になると思えば、すぐ懺悔式をやつてくれた。というのも、貧しい托鉢僧に物を与える人は、またよく懺悔式をやつてもらう人ということになつてゐるからだ。そして、もし人が托鉢僧に金を出したら、その人はきつと後悔してゐる人にきまつてゐるからだ、その托鉢僧は断言した。けだし人間には、どんなに心をいためても泣けないような無情な人がたくさんある。だからそういう人は泣いたりお祈りをしたりする代りに、貧しい托鉢僧に銀貨をくれたらよいのだというのである。

彼の頭巾には、ナイフやべつびんさんにくれるピンなどをたくさんつめてこんでいた。彼は確かに陽気な声音をもつていた、また絃琴に合わせてよくうたつた。民謡をうたわせると天下第一品、誰も及ぶものがない。この男の頭はいちばつの花のようにまっ白であつた。そのうえ角力は玄人はだしであつた。

彼はどこの町でも居酒屋や旅籠屋なら知つて

いる。なりんぼうや乞食よりも、宿屋の亭主や酒場の女給のほうをよく知っていた。というのは、彼のような偉い男が、その位置からしても、そういうかったいとちかづきだということはまことに工合がわるかった。金持や飲食業者とつきあわないで、そういう貧民ばかり相手にしていたのでは名誉なことでもなし、利益にもなりにくい。所きらわず、利益にさえなれば、彼は礼儀をつくし、ペコペコ頭を下げて勤めるのだ。彼はど高潔な男はなかった。

自分の寺では最大の乞食であった。というのは、一足の靴さえもっていない貧乏なやめ暮しの女のところで、托鉢に行けば、そのお経の文句にある「イン・プリンチビョー」を実になごやかな声で唱えて、一文でも手にしないうちには帰らなかつた。その貰いのほうが彼の定収入よりもはるかによかつたからである。

また、まるで仔犬のように駆けずり廻った。

調停裁判のある日などは、裁判に頼まれて、非常に貢献するところがあつた。そこでは、苦学生のようにぼろぼろの上衣をつけた托鉢僧のようではなく、偉い先生が法王のように見えた。彼は着ていた短上衣は双子毛糸で、鋤型から出たての鐘のようにまん丸かつた。彼はやや舌もつれの癖があつて、彼の英語は舌の上で甘たくなつた。

それから歌をうたつて絃琴をひく時など、彼の眼は霜夜に光る星のように額の奥できらきら光った。この公認托鉢僧はフーベルドとよばれた。

一人の貿易商がいた。二またに分れたあこひげをはやして、まじり色の服を着ていた。高々と馬に乗って、頭にはフランドルの海狸の毛皮の帽子をかぶっていた。彼の深靴は立派な締め金がついていた。

自分の説を大げさに吹聴して、いつも自分の金儲けの話をほめかしていた。オランダのミッデルブルヒと英国のオレウエレ河の間の海上は、どんな犠牲を払つても、安全区域として護りたいものだと思つていた。フランス貨のシェールドを売つてうまく為替で儲けることを心得ていた。この大人はなかなかぬけめのない男であつた。利買いや思惑で、がっちり構えているので、損をしたためしがない。じつさいのところ立派な男には相違ないが、世間ではこの男をなんとという名前と呼んでいるのか。

またオックスフォードの学僧がいた。長いあいだ論理学に憂き身をやつしていた男だ。彼の乗っている馬は熊手のように瘦せこけていた。見かけたところ、彼自身も太っているどころか、がくがくしていて、どこかしやつめらしく見え

た。上にひっかけていた学生服は実際ほろほろになつていた。まだ僧職にもつかず、俗界にはいつて役人になろうともしなかつた。びかびかの長袖の官服よりも、また提琴や立派な絃楽器よりの、むしろアリストテレスの哲学書を黒や赤の表紙に綴じて、ベッドの枕もとに置くほうが似合つていた。学者であつたらうが、彼の銭箱

に黄金はあまりなさそうだ。友達から借りた金はことごとく書物や学問に使つた。だが、学資をみついでくれた人たちの靈魂の極楽往生のためには、お祈りにせつせといそしんでいた。小心翼々、精魂こめて勉強した。よいいなことはひとことたりとも言わないで、言えは礼儀正しくしとやかに、また簡潔に素早く、しかも含蓄の味わいをこめて言つた。

彼の話はすぐ道徳論になりがちで、よく学び、よく教えることを楽しんだ。

すばしこそうな法律家が一人いた。聖ポール寺で開かれる弁護人の協議会でおなじみの傑物だ。考え深そうな、上品に見える人だ。言うことが賢明なので、なおさらそう見えた。

彼は特許により、また治安裁判職全権として、巡回裁判所の判事に任命されたことが幾度もある。その学識と名声によつて、たくさんの給料と官職とにありついていた。彼はど金儲けのうまい者もあまりいながつた。あらゆるものに絶対所有権を設定し、無効な売買をやつたことはない。彼はどいそがしい人もあまりないが、しかし実際よりもいそがしそうに見えたのだ。ウィリアム一世時代から起こつたあらゆる裁判事件とその判決例にことごとく通じていた。なお彼は公文書類の作製にも通じていて、だれも、彼が書いたものに誤りを発見することができなかった。どの条文も暗記していた。網の紐を帯にして、小さい飾りのついた、まじり色の外套を着て、質素なふうで、馬に乗っていた。彼の身な

りについては、これ以上言わないことにする。

小地主階級の郷土が一人、この法律家の連れとして来ていた。そのあごひげはまっ白で雛菊のように見えた。血色は多血質の紅色であった。朝飯にはぶどう酒の中にパンをひたして食べることが好きであった。彼は快楽の中に生活することを常としていた。快楽主義の哲人エビクトルスの真の子で、「完全なる快楽こそ真の完全なる幸福なり」というのが、彼のモットーであった。

彼は、一人の家持ちであり、しかも偉大なる家持ちであった。郷里では、一人の聖ジューリアンとでもいうべきものであった。パンもビールもひとしく上等なものであり、ぶどう酒も彼はど優良なものを貯蔵している人はあまりなかった。その家では魚と肉との焼き物はいつでも食べられるし、しかも豊富にあつて、肉と酒、その他ありとあらゆる珍味が家の中にうず高く積んであった。

四季の季節に随つて彼の食物と食事がかわつてゆく。鳥小屋には太ったしゃこをたくさん飼つていたし、生簀にはブレムという鯉の一種やおがますをたくさん飼つていた。ソースがびりつききめがなかったり、食器などがちゃんとう意されていなかったら、料理人はご難！ホールに備えつけの食卓には一日じゅういつも食事の用意がしてあった。四季の治安裁判が開かれる時には議長や司会になり、幾度か代議士にもなった。帯のところには、短刀と朝の牛乳

のようにまっ白な絹の巾着とがさがつていた。また彼は州長もやったし会計検査役もやったことがある。これはど立派な家来はあまりいない。

われわれの仲間には、また一人の帽子屋に、大工に、機械に、染物屋に、家具商がいた。何か偉い組合の団体で、皆揃いの服装をしていた。彼らの服装の飾りはみんな新調のばりばりだ。彼らが所持しているナイフのこじりは真鍮でなく、全部銀で作られ、その細工も実にきれいにできていた。彼らの帯も巾着もみんなどの部分をみて、きれいに作られていた。

これらの人たちは、どの人をみて、市役所のホールの一段高いところに坐る市会議員になつても恥かしくない立派な町人に見えた。どの人も皆、その見識からいって、市会議員になるにふさわしい人ばかりであった。財産も収入も十分ある。また彼らの細君も亭主が議員になることに賛成するはずだ。もし反対なら確かに細君のほうが悪いのだ。「マダーム」と呼ばれ、組合の祭には正面に立つて参列して、女王のようにマントを着て、その長い裾を人にもたせるのも悪くはない。

この組合の連中は、一人の料理人を連れて来た。雛鶏の骨髄をブロードレ・マルチアウントという香料とガリンガーレという香料とで煮物にするためだ。この男はよくロンドンのビールの味を鑑別した。焼くことも、煮ることも、照り焼きも、フライもできるし、ポタージュもつくれるし、パイもよく焼いた。気の毒に思われたの

は、この男が向う腰に瘰癧をでかしてしたことだ。ブランクマンジェールという去勢した雄鶏の肉を入れたプリンにかけては、天下一品であった。

船長が一人いた。これはずうっと西部に住んでいた男、確かデルテムーゼの人間であった。膝のところまで荒い粗悪な地の長上衣を着て、巧妙に百姓馬に乗っていた。短刀を紐につけて、頸から腋の下へ吊るしていた。夏の陽で色がまっ黒に焼けていた。確かに愉快なやつだ。ポルドーからの帰途、商人が睡っている間に多量にぶどう酒をかすめ取ったことがある。良心の呵責などは持ちあわせがない。海で荒仕事をして、高圧手段に出る時は、「どこへでも勝手に帰るがよい」と、相手を海中へ投げ込んだ。

だが、潮や潮流や海上の天候や港や月や水先案内のことなどを判断する術にかけては、ハルからカルタゴにいたる間にもこの男にかなうものはない。

彼は事をかまえるに大胆で、用意周到であつた。いざいざ暴風雨にあつて、彼のあごひげはひどく風雨にうちたかれた。ゴットランドからスペインのフィニステレー岬の間にあるどの港の実情にも通じていた。またブリタニーやスペインにあるどの入江も浦も知っていた。この船長の船の名はマグダレンとよばれた。

われわれの仲間にはまた医学博士が一人いた。医薬と手術にかけては、世界じゅうに彼ほどの

者はいなかった。それも天文学に造詣が深いからである。彼は占星術に従って患者の生れ月日や時刻を微細に調べた。その患者の生まれた時刻に地平に昇った星が何星であったか調べて、その星でその病人の運勢を占うことを知っていた。

いかなる病氣の原因をも知っていた。それが熱氣か寒氣か湿氣か乾氣か、またどこにそれが生ずるか、またどんな体液の性質かを知っている。彼は実に完全な医者であった。原因と病氣の根元がわかりさえすれば、ただちに病人に治療を施した。自分の取りつけの薬剤師に用意させて生薬や砒剤をとけさせた。おたがいの儲けとなるからだ。この両者のつきあいは昔からのことである。昔からの医薬の神や有名な医者のことをよく知っていた。古代のエスキューラーピウスや、デーイスコーリデスや、エクリューフスや、古代のイポクラテスや、ハーリーやガリーエン、セラピオン、ラズエイスや、アヴィセン、アヴェロイス、ダマセニスや、コンスタンティーン、ペルナルドや、ガートスデンや、ギルベルティン。

彼は食事に節度を守り、食べすぎず、栄養をたくさんとり、消化のよいものを食べた。聖書の研究はあまりやらなかった。

琥珀織や薄絹織で裏地をつけた真紅色や空色のきれいの衣服をつけていた。だがしかし彼はともかく儉約なもので、悪疫流行の時代に手に入れたものをまだもっていた。薬剤に入れる金は強壯剤であるから、彼はとくに黄金を愛したの

であった。

バースの近辺から来たおかみさんがいたが、惜しいことに少ししつぽだった。機織の上手なことはイブレスやガウントの人たちをもはるかにしのいだ。供物の献納式の順番はこの女房が一番で、あえてこの女房の先駆けをする女はその教区には一人もいなかった。もし先駆けするものがあつたら、この女房はきつと憤慨して、慈善心をことごとくなくしてしまふ。頭にかける布地が非常に上等で、日曜日にかぶる頭巾ときては十ポンドも目方があるに違いない。この女のはいている長靴下は立派な猩々緋で、びつたりと、きつと、身についていた。靴は柔かい新調のもの。

顔はきつとあだつぽく、色白で、赤味色。もたらしつかりもの。若い時分の色男は別としても、正式の結婚でもった亭主は五人いた。だがこのことについてはいま言う必要はない。

またエルサレムへは三度も巡礼にいった。

他国の河や海をいくつも渡って、ローマにも、ブローニュにも、ガリシヤの聖ジエムズ寺院にも、コロニーにも参詣にいったことがあつた。旅のさすらしい経験をいくどもなめた。実をいうと山羊齒で、すこし出っ歯な女であつた。調子で歩く小馬の上に楽しそうにまたがり、顔を尼頭巾でよく包み、頭の上には円盾的のようなたつぱの広い大きな帽子をつけていた。大きなお尻のところに膝掛けをまいて、足には鋭い拍車をつけていた。仲間と一緒に笑ったり話

したり。おそらくこの女は「恋の療法」ということを知っていたのであろう。というのも、この女は古えの恋の秘術をよく心得ていたからである。

宗教家のおじさんがいた。村の貧しい牧師であつた。だが信心深い心に富み、神に仕える仕事はなんでも喜んでした。彼はまた教養があり立派な学者で、キリストの福音を真実に説ける人であつた。教区の人たちを献身的に教えるのであつた。

優しい人で、驚くべき勤勉家、それに堅忍不拔な人であつた。このことは彼のおこないで実際に証明されてゐた。教会に納める十分の一税を滞納する人があつても、それがためその人を破門するというようなことは嫌つた。いなむしろ、自分の教区に貧乏な人がいると、きつと教会の献納物を分け与え、また自分の財産からも出してやったのであつた。自分は僅かなもので十分満足できた。

彼の教区は広く、人家がまばらにとび離れていたが、雨が降っても雷が鳴っても、病氣の時も心配のある時も、いちばん遠い家までも、上下の区別もしないで、彼は手に杖をもち、歩いて訪ねることを怠らなかつた。「まずみずからおこなつて後これを教える」という立派な模範を教区民に示した。この訓言を福音書から引用したり、また、これにつけ加えて「もし金にし銅びることあらば、鉄は何をかなさん」という比喩を言つた。けだしわれわれの信頼する牧師

が腐敗すれば、俗人の錆び腐るは当然のこと。牧師として慎しむべきことはほかにある。不潔な羊飼いが潔白な羊をみちびく図なぞは恥ずべきことだ。牧師はみずから潔白なおこないをして、いかに生くべきかを教区民に示して模範になるべきだ。

この牧師は自分の僧職を貸しつけて自分の羊である教区民を泥の中へ追い込み、自分はロンドンへ出かけて、聖ポール寺院で施主の冥福を祈るミサ僧の職を求めたり、あるいは組合の専属の坊主として雇われたりするような、僧職売買はやらなかった。彼は地元に住んで、狼に荒らされないように羊小屋をよく守った。彼は羊飼いで雇い人ではなかったのだ。また彼は身を神に捧げた高德な人であったが、罪人に対してもけつて苛酷でなく、言葉使いも傲慢不遜ではなく、慎し深く優しくとした。正直な生活を模範として人を天国へ導くことが彼の仕事であった。もし頑迷な人がいる時は、その人が何びとであろうとも、身分の高い人でも低い人でも、その時はきびしく叱りとばした。これほど立派な牧師はどこにもいないに相違ない。また虚飾を求めず、人からの尊敬をも求めず、さればとて、あまり良心的に偏狹に失することもない。キリストの教えやその十二使徒の教えに、まずみずから従ったのだ。

彼と一緒に一人の農夫がいた。牧師の兄弟であった。郷里ではたくさんの肥を車でひっぱったりする真面目な労働者で、安楽に、また完全な愛の精神に生きていた。嬉しい時も悲しい時

も、常に全心を捧げて神をいちばん愛した。それから近隣の人たちを自分自身のごとく愛した。貧しい人のために、賃金をとらずに、キリストのために、力の及ぶかぎり、穀物を連枷で打ったり、土を掘ったり、溝を掘ったりしてやった。十分の一税は自分の労働と自分の財産から、とどこおりなく納めた。粗末な上衣を着て、牝馬に乗っていた。

また一人の莊園労働者の親分と一人の粉屋がいた。また一人の宗教裁判所の召喚刑事と、法王の赦罪状売りの旅僧もいた。それから他にロンドンの法曹協会の賄人と、私とだけであった。その粉屋は頑丈そうな野郎で、筋肉のたくましい、骨組みの大きいやつであった。角力では、どこへ行っても、いつも一等賞をもらったというが、いかにもそうらしい。肩がずんぐりして、幅が広く、がっちりしている骨組みの男で、どんな戸でもその蝶番をはずしたり、いきなり駆けていって、自分の頭でそれをたたきこわすことができた。そのあごひげは牝豚か狐のように赤く、また、まるで鋤のような形になっていて、幅が広がった。鼻のてっぺんにこぶがあつて、その上に一ふさの毛が生えていた。それが牝豚の耳の針毛のように赤みを帯びていた。鼻孔はまっ黒で広く開いていた。

腰には、刀と円盾をさげていた。口はかまどのように大きかった。おしゃべりのふざけもので、下卑た話をするやつだ。話したいいて、罰当りな卑猥なものであった。よく穀物をこまか

したり、三倍も粉張き賃を取り上げたりするが、それでも「黄金の親指」(「正直な粉屋は黄金の親指」をもっている珍しく正直者の粉張きだといわれていたが、ふざけた話だ。白い外衣を着て青い頭巾をかぶっていた。革袋の風笛を吹くことが上手であった。そこで、こいつをわれわれの先頭に立たせて町からくり出した。

法曹協会のおとなしい男がいた。およそ名のある賄方は、みなこの男から食料をうまく仕入れる模範的な方法を覚えたのだ。現金で支払うか、掛けで品物を取るか、常に買入れに注意し、人の機先を制して成功したからである。そういう無教育の男の才知が、多くの学問ある人々の知恵をしのぐとは、神のきわめて公平な摂理なのであるうか。

彼が勤めている法曹協会には三十人以上の先生がいた。みな法律に精通している専門家で、その人たちの多くは、イギリスじゅうのどの殿様の家臣になつても、その殿様の収入や土地の管理をやり、殿様がとくに馬鹿げたことをさえてでかさなければ、借金せずに立派に殿様が自分の財産で生活するようにも、また殿の思召しによつては、どんな儉約なきりつめた生活もされるように、うまく管理することができる偉い人たちであった。

またどんなことが起ころうと、一国の経済を助けることのできる才能をもっている人たちでもあった。けれどもこの賄人はこれらの先生たちの上手に出た。

その親分はやせた怒りっぽい男だ。そのあごひげは剃るだけよく剃っていた。頭髮は、耳のぐるりを小ぎれいに刈り込んでいた。額のところを坊さんのように短く刈っていた。脚は非常に長く、やせて棒のようで、こむらというものがなかった。

穀倉と貯蔵場とをよく取り締まった。監査役が来て、この親分には誰もかなわなかった。彼はまたひでりの年にも、雨の多い年にも、自分の播いた種からどれほど取れるか、また穀物の収獲がどれほどになるかよく知っていた。ぬすんだ分はひでりと雨のせいにした。主君の羊も牛も搾乳場も豚も馬も農具も家畜も、みんなこの親分の支配のもとにあった。主君がまだ二十歳のときから、契約どおり莊園の勘定報告書を出していた。彼はけっして遅滞することがなかった。その莊園の執事や羊飼いやその他の雇人どもの策略やごまかしを、みなよく知っていたので、彼はみんなから悪疫のごとく嫌われていた。

彼の住いは草原の上にあつて、その屋敷は緑の樹々の木蔭につつまれてきれいであつた。

主君よりも良い買物をしていた。ひそかに彼は豊富に買い込んでいた。自分自身の財産から出したり貸したりして、主君をうまく喜ばせ、ありがたがられ、褒美に寛服や頭巾などを賜わることができた。

若い時分によい手職を覚えた、非常に立派な腕前の大工であつた。この親分はねずみ色の斑

の馬に乗つて、その馬の名をスコットとよんでいた。青色の長い上衣を着て、腰のところに錆びた刀をさげていた。この親分はノーフォーク州の座で、バルデスウェレという町の近くから来た。托鉢僧のように帯で着物をたくし上げていた。そしてわれわれ一行のしんがりとなつていた。

一人の刑事がわれわれの一行にいた。火のように赤い顔をして、天使童子のようであつた。目が細く、吹き出物だらけであつた。すずめのように好色で、淫奔らしかった。きたならしいまっ黒な眉があつて、ひよろひよろの薄いあごひげが生えていて、子供はみな、彼の顔をこわがった。どんな水銀も密陀僧も、あるいは硫黄も礬砂も白鉛も酒石英も、あるいは腐蝕し消毒となるどんな軟膏も、彼の顔の白い吹き出物や頬に出てゐる節瘤を治すことができなかった。

彼は好んでにんにく、玉ねぎ、にらを食べ、血潮のようにまっ赤な強いぶどう酒を飲んでゐた。飲むとしやべりだし、氣違ひのように叫んだ。ぶどう酒をしたたか飲んだ時は、ラテン語以外の言葉はしゃべらない。ある判決文から二、三の文句を覚えていたのだ。一日じゅうそれを聞いていたのだから無理もない。かけずきえ、法王の口真似をして、「ワットよ」なんて言うぐらいなんだからね。だが他のことで彼の知識をさぐってみると、もう彼の哲学は使いつくされてゐた。何かというと、「クウェスチョー・クウィッド・ユリス」と言う。「問題はいか

なる法規がこの判決に適用されるかである」という意味のラテン語である。彼はおとなしい親切なやつこさんだ。彼よりいいやつは見当たらない。飲み仲間が、六合三句のぶどう酒をおごりさえすれば、妾とちくりあうのを二年間でも見ないふりをしてゐる。だが、かげではひわの毛をむしり取るような、つまり、お人好しをだましてまきあげるような真似をする。妾をも仲間がいると、宗教裁判長の破門などは、なんにもこわかないものだ。人の靈魂は財布の中にあるのではないから、と教えてやる。「財布はすなわち裁判長の地獄にあたる」と彼は言うが、これはもちろんでたらめだ。どの犯人も破門のこわいことは知るべきだ。破門は人を殺し、赦罪は人を救うもの。破門状には氣をつけるがよい。

この男は、監督管区の若い人たちをみんな自分の思うがままに御していた。若い人たちの秘密も知り、どんなことについてもかれらの相談相手になつてゐた。

頭には居酒屋の看板にもなりそうな、大きい葉の環冠をのけて、円盾のような、平たい丸いパンをもつてゐた。

彼とならんで馬に乗つてゐたのは、ロンドンのルースイヴアルの僧院から来た赦罪状売りで、この刑事の仲間であつた。ローマ庁からまっすぐにやつて来た。大きな声をはりあげて、「こちらへおいでよ、いとしい女、わたしのところへ」と流行歌をうたつた。刑事も太いバスの低

音で、一緒になつてうたつた。らっぱの音だつてその声の半分にも及ばなかった。

この赦罪状売りの頭髪は蜜蝋のように黄色く、亜麻糸のようになめらかに垂れていた。その僅かな垂れ髪が肩の上にばらばらに広がっていた。だがそれが一本一本切れぎれに、薄くかかっている。でも頭巾はかぶらないほうが陽気がいい。頭巾を頭陀袋の中にしまいこんでいた。

最新流行のスタイルで馬に乗っているつもりであった。帽子は別だが、すべてむき出しで、さんばら髪のまま、馬に乗っていた。野うさぎのようなぎらぎらする眼。キリストの顔を描いた頭布を帽子の上に縫いつけていた。頭陀袋は膝の上において前のほうにもつていた。その中にローマから来たばかりの赦罪状がいっぱいつまっていた。

山羊のような、悲しげな小さい声だ。あごひげはなかったが、これからも生えることはないだろう。頬は剃りたてのようにすべすべしていた。去勢馬か牝馬ならこんなものかと思われた。だが悪知恵にかけては北のベリックから南のワレのあいだには、この赦罪状売りほどの者は他にみられない。頭陀袋には、枕掛けを入れておいて、それを、聖母の被衣だとぬけぬけと言っていた。キリストにひき上げられるまで海を渡っていた聖ペテロの帆のきれはしもあると言っていた。宝石を一面にちりばめた真鍮の十字架をもっていた。ガラス箱の中にはまた、豚の骨を入れていた。そうした嘘の聖骨や聖宝で、貧しい田舎牧師の二カ月分の給金よりもたくさ

んな金を、一日で手に入れるのであった。

そんなふうに、嬉しがらせの嘘や、でたらめのごまかしで、牧師や田舎の人たちをだまして金をまきあげた。だが実を言うと、洗ってみれば、彼も教会の立派な教師なのだ。朝夕の祈禱には、聖書からの日課や聖者の伝記がよく読めた。だがなかでも奉獻誦をいちばんうまうたえた。それも歌が終われば説教しなければならぬということも、またできるだらうまく金を儲けるために舌をよく研がねばならないということも、彼はよく知っていたからだ。だからそれだけいつそう愉快そうに声をはりあげてうたったのだ。

さて簡単ではあったが、私は、この団体の人の身分や身なりや、人数のこと、またスウェルクの「鐘屋」という旅籠のすぐ近くにある「陣羽織」というこの立派な宿屋に、この団体がどういうわけで集まったかということなどこれですっかり話してしまつた。

だがこんどは、この宿屋に泊まつた晩、われはどんなことをしたかということや、その次にはわれわれの巡礼の旅のことを、すっかりもらさずに話しましょう。だが最初に、失礼ながらお願いがある。ほかでもない、あの人たちが言つたことや、あの人たちのようすを少し率直に述べさせてもらいたい。

その人たちが言つたことを、言葉どおりにそのまま伝えたとらとて、私自身が礼儀も知らない野人だと取られては心外だ。というの、みなさんもよくご承知のとおり、いったいある

人物があるがまさに描くためには、どんなに不作法無遠慮になつたところで、その人物の言つた言葉をそのまま気づいたとおりに、どんな言葉でもそのまま正確にうつして述べることがかんじんだからである。そうやらないと話が嘘になり、ものをいつわり、まったく別なことを言うことにならざるを得ないのだ。相手が兄弟であらうと遠慮に及ばない。誰が言つた言葉でも言葉には変りがないはずだ。キリスト自身、聖書の中で実に率直にお話しなされたが、誰にもそれが田夫野人の言葉とは思われない。読める人は読んでみるがいい。確かにプラトンはこういっている、「言葉はおこないの親類でなければいけない」と。なおまたこの物語に出る人たちの身分については、席次万端不行届きの点はお許しを願いたい。なにしろふつか者のこととて、大目にみていただきたいものだ。

宿屋の亭主は、われわれを一人一人非常に愛想よくもてなし、早速夕食につかせてくれた。最良の料理を出した。強いぶどう酒が出て、みんなよく飲んだ。

亭主もまた王侯の饗宴の接待役にしても恥かしくないほど気のきいた男だ。大柄で、眼は鋭い。ロンドンの東部チェーベへんでは、これほど立派な町人はいないだろう。臆面なく話し、利口で教養があり、男として欠けているところは一つもなかった。またそれに非常に朗かな男で、夕食後、われわれが勘定をすましてから、彼はしゃれを飛ばし、とくにおかしいことを言つて笑わせた。それから、こんなことも言つた。

「さて、どんな方、ほんとうによくお出でくださいました、感激にたえない次第でございます。というのも、実は嘘は申しません、ただいまこの宿にいられるようなご連中はどの朗かなお方たちは、今年になってはじめてでございます。だが、どうすればみなさんを愉快におさせできるかわかりませんが、ただいまおもてなしをする面白い方法を考えつきました。それもけつして銭のかかることじゃございません。

みなさんはカンタベリにおいでなさる。まあ、ご無事でお出でなさいませ。聖者様もきつとその報いはお返しなさることでしょう。ところで、道中はまたきつと、昔話や冗談話でにぎわうこととでございましょう。なにしろ、石ころのように口をつぐんで、だまりこんで旅をなさるのは、面白くもおかしくもないことですからね。それで、先ほど申しあげましたように、何か面白いことをして、お慰め申したいと思えます。まあ、手前の考えたことに、おひとり残らず賛成なさってくださいませ。明日からの道中で、手前がこれから申しあげるとおりにおやりくださったら、なあに死んだおやじの魂に誓っても、きつとみなさんは愉快に旅がおできになりますよ。さもなくば、手前の首を差しあげましょう。もうなにも反対なさらずに、みんな手をあげて賛成なさってくださいませ」

われわれは長く相談するに及ばなかった。これはなにも熟慮すべき価値のある事柄でもないと思われたので、一も二もなく彼に賛成して、遠慮なく彼の考えを言ったらよいと命令した。

彼は言った——「どんな方。さあ、悪くともらずに聴いてくださいまし。だが馬鹿にしちゃいけませんよ。早く申せば、これがその要点でさ。道中を短くする量見で、カンタベリへの旅の道草に、どなたも話を二つずつなさることにきめましょう、ようござんすか。婦りの途でまた二つずつ、昔起こった事件の話を。で、みなさんのうちでいちばんうまくやってのけられた、つまり、いちばんためになり、またいちばん面白い話をなされた方はどなたでも、カンタベリからのお帰りに、またここで、この場所で、この柱のところに坐られて、ほかのみなさんの費用で夕飯のご馳走をおごってもらうということにいたしましょう。

それで、もつと興をそえるために、わしも空腹をきつて、ご案内がてらご一緒にお供をしてみたいと思ひます。

わしの意見に反対なお方には、旅の費用を全部交弁していただきますよう。

これに賛成なさる以上、もうぐずぐず言わずに、すぐにそう言っていたきます。そうすりゃあ、わしもこれから、すぐに支度にとりかかりましょう」

この話はみんなの賛成をえた。われわれは心から賛成を誓った。亭主に頼んで、われわれの団長になり、物語の鑑定と審判の役をつとめたり、また帰りに適当な値段で夕飯も用意するようにと頼んだ。またどんなことでも亭主の支配には従うことにした。そんなふうに、満場一致で彼の意見に従った。まもなくぶどう酒が出

た。われわれはそれを飲んでから、われ先にと床についた。

翌朝、夜が明けかかるやいなや、もう亭主は起き出でて、鶏の役をしてわれわれをみな呼び集め、それから一同は隊をつくって、並み足より少しばかり早い歩調でくり出した。

聖トマスという小川のところで、亭主は馬を止めるとうろ言った——

「どんな方。なにとぞおききください。さあ、例のお約束を思い出してください。夕暮の祈りと朝の祈りが同じなように、昨晚おっしゃったことが今朝もほんとうなら、お約束どおり、どなたが先に話をなさるか、さあこれからきめましょう。嘘だとは言わせませんよ。わしの意見に反対なさる方は、どうか旅の費用を全部もっていただきますよう。

さあ、くじを引かないうちは、一步も先へ行つてはいけません。いちばん短いのを引いた方が最初にお始めいただきたい。

お侍様、さあどんな様。さあ、くじをお引きください。そりゃ約束でございます。

さあ、尼寺のお総持様、もう少し近くおよりくださいませ。

あの先生、あなたも遠慮をなさらずに。腹想や研究は、しばらくおやめになつて。さあみなさん、お引きください」

すぐに、みんなはくじを引いた。すると、結局、どういうはずみか、偶然にも、くじは騎士に当たった。みんなはやんやと喜んだ。それでどうしても、騎士は約束の話をひとつやらなけ